

# 福島県双葉郡川内村における復興・創生の取組としての ワインブドウプロジェクト



企業レポート

小川 高宏\*

Grape Wine Project as a Reconstruction and Revitalization  
from the Great East Japan Earthquake at Kawachi Village, Fukushima Prefecture

Key Words : reconstruction and revitalization, wine, metabolomics

## はじめに

2011年3月11日の東日本大震災、そしてその後生じた東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、福島県の相双地域を中心とし、一時は16万4千人を超える方が避難を余儀なくされた<sup>1)</sup>。2021年3月で10年を迎えた今でも、福島県の相双地域には帰還困難区域が存在しており、復興に向けた活動が続いているのが現状である。

私が所属するデロイトトーマツグループは、監査、税務、法務、コンサルティング、ファイナンシャルアドバイザーなどの様々専門家を有している。東日本大震災以降は、グループを挙げて復興支援活動を強化・推進するために復興支援室が設立され、復興支援に注力している。今回は、縁あって私が関わった福島県双葉郡川内村で取り組んでいる復興・創生プロジェクトについて記載させて頂く。

## 川内村の復興、そして創生へ

川内村は、福島県の中でも、浜通りと呼ばれる海沿いの地域から、やや西に位置し、平均標高が約456mの高原である。村の総面積19,735haのうち、林が約90%を占めており、かつては、この豊富な森林資源を活用し、日本一の木炭生産地となり、一時は村税が無税となるほど裕福な村であった<sup>2)</sup>。



図1：川内村の位置<sup>3)</sup>

現在の基幹産業は、農林業である。観光名所としては、希少種「モリアオガエル」の繁殖地として天然記念物にもなっている「平伏沼(へぶすぬま)」や、詩人草野心平が滞在していた「天山文庫」をあげることができる。

このように自然豊かな川内村であったが、福島第一原子力発電所から30km圏内に位置することから、東京電力福島第一原子力発電所の事故により一時避難を余儀なくされた。その後、2012年末には、避難自治体として初めて遠藤雄幸村長が「帰村宣言」を行った。被災12市町村の中では、早期に住民帰還を開始したこともあり、帰還率は8割を超えた。しかし、震災当時の住民登録者数3,038人と比べ、2021年2月1日現在の村内生活者は2,053人と、震災前の人口水準の約2/3に留まっている<sup>4)</sup>。

そのため、川内村は新たな村の創生に向け、様々な取り組みを実施している。例えば、新たな村づくりを強力に推進するために、一般社団法人かわうちラボを立ち上げた。川内村を訪れる「交流人口」や川内村や川内村の人々と多様に関わる「関係人口」拡大のために、2016年より「川内の郷かえるマラソン」を開催している。このマラソン大会には、毎年1,500名以上の方々が福島県内外から参加してい



\* Takahiro OGAWA

1982年1月生まれ  
大阪大学大学院 工学研究科 先端生命  
工学専攻 博士後期課程 (2020年)  
現在、デロイト トーマツ ファイナン  
シャルアドバイザー合同会社 シニア  
アナリスト 博士(工学)  
TEL : 03-6213-1180  
E-mail : takahiro1.ogawa@tohatsu.co.jp

る。他にも、地元の酒米を使った地酒「歸宴（かえるのうたげ）」の生産、工業団地の整備に伴う産業誘致を行っている。これに加えて、村が精力的に取り組んでいるのが今回ご紹介する「ワインブドウプロジェクト」である。

### 「ワインブドウプロジェクト」による新たな村づくり

川内村では、村の復興・創生、そして新たな産業への挑戦として2016年度から「ワインブドウプロジェクト」を立ち上げた。川内村でのワイン事業は、関係団体からの提案をもとに、地域住民主導で開始したことが特徴的である。標高約700mにある高田島ヴィンヤードの3haの土地には、シャルドネ、カベルネソーヴィニヨン、メルローなど、合計約10,000本のブドウの木が植栽されている。あくまでも個人の感想であるが、山道を抜けた後に広がるこのブドウ畑は絶景である。是非とも訪れて頂きたい。



図2：高田島ヴィンヤード

ブドウ栽培は、地域住民をはじめとし、ボランティアの方々、地域おこし協力隊の協力を得て、2021年で6年目を迎える。ワインブドウは、一般的には、植栽3年後から徐々に実をつけだし、十分な収量を得るためには5年以上の歳月がかかる。それまで会社としての売上を見込めないため、村からのサポートを得ながらここまでやってきた。自社の圃場で収穫したワインブドウを醸造するための醸造所が間もなく出来上がる。そして、2021年の秋には自社ヴィンヤードで収穫されたワインブドウを用いて自社醸造を行い、ワインの販売を開始する。

川内村としては、新たなワイン産業の成功を目指すとともに、ワインをきっかけとして、村内の方々と一緒に、新たな村のにぎわいを作り出していきたいと考えている。そのために、新たに作られるワイ

ナリーが、村民に愛されるワイナリーとなること、ついで、川内村外の方に川内村を認知してもらい、川内村に足を運んでもらうための仕掛けを作る必要がある。私が所属するチームでは、川内村の「ワインブドウプロジェクト」を推進するために、かわうちワイン株式会社の事業計画策定や村のにぎわいに創出に関して、約2年間にわたってご支援させて頂いた。

表1：ワインブドウプロジェクトの略歴

2016年	地域住民主導で「高田島ワインブドウ研究会」設立し、ブドウ栽培開始
2017年 2月	かわうちワイン推進協議会設立、ブドウの追加植栽
2017年 9月	かわうちワイン株式会社設立 <a href="https://www.kawauchi-wine.com/">https://www.kawauchi-wine.com/</a>
2021年 5月	ワイン醸造所完成予定

### 学術研究機関との連携による支援

川内村のご支援の中でも、ここでは学術研究者からの協力を得ながら行った支援について述べさせて頂く。私個人としては、大阪大学の福崎研究室にて、メタボロミクスの研究に関わってきた。メタボロミクス (metabolomics) とは、代謝産物の総体を解析するものである。私は、中でもフードメタボロミクスと呼ばれる分野の研究に従事していた。フードメタボロミクスでは、食品の品質評価、食品製造の原料品質の評価、食品の安全性の確認など、様々な用途でその研究や実用化への取組みが行われている。今回は、2020年に川内村の高田島ヴィンヤードで収穫したブドウを醸造したワインが、同一ブドウ品種のワインと比較して、どのような特徴があるのかを見出すために、メタボロミクスの技術を活用することとした。

本プロジェクトには、ワインの専門家として山梨大学ワイン科学研究センター奥田徹教授、栽培の専門家として福島大学食農学類の高田大輔准教授に、そしてメタボロミクスに関係しては香気成分分析の専門家として神奈川工科大学飯島陽子教授、NMRの専門家として福島大学食農学類の尾形慎准教授と、多様なメンバーに参画頂いた。

奥田教授には用意したワインの官能評価や

LC/MS で計測した有機酸の定量データから、川内村のブドウやワインの特徴に関する様々な示唆を頂いた。高田准教授には、高田島ヴィンヤードに足を運んで頂き、ワインブドウ栽培の管理方針等についてご意見を賜った。飯島教授に GC/MS を用いた香气成分の一斉解析、尾形准教授には NMR を用いた代謝産物の一斉解析を実施頂いた。これらの一斉解析で得られたデータを主成分分析にかけることで、今回の委託醸造されたワインが、同一ブドウ品種のワインの中で、どのように位置づけられるか、また、特徴となる成分がどんなものであるか。見える化を行うことに成功した。今回見出された特徴が、継続的なものであるか、次年度以降の分析に期待するところである。



図3：川内村産のブドウで作られた初のワイン

## おわりに

川内村の「ワインブドウプロジェクト」は、まだ立ち上がったばかりであり、今後益々の発展が期待される。我々の今回の支援が、少しでも川内村のお役に立つことを願うばかりである。また、この記事を通して、少しでも多くの方々に川内村を知って頂ければ幸いである。

なお、デロイトトーマツグループには多種多様な方が所属しており、最近では DTST (Deloitte Tohmatsu Science Technology) という新たな組織が立ち上がった<sup>5)</sup>。DTST には、研究経験とビジネスの経験をもつ「サイエンス・テクノロジー × ビジネス」のハイブリッド人材が 200 人以上所属している。このハイブリッド人材が、デロイトの強み(第三者性、規模、グローバル、中長期のビジネススパン、専門性、推進力、プロジェクトマネジメント能力)を最大限活用して伴走支援することで、シーズの社会実装までを支援することを目的とした活動を開始している。ご興味のある方は、気軽にお声がけ頂ければ幸いである。

末筆になるが、この記事の記載をご了承頂いた川内村・かわうちワイン株式会社の皆様、川内村の「ワインブドウプロジェクト」に参画させて頂いた公益社団法人福島相双復興推進機構(福島相双復興官民合同チーム)、そして今回協働したチームメンバーに対して改めて感謝を申し上げる。

## 参考文献

- 1) 第二期福島復興計画  
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/438480.pdf>
- 2) 福島民友 HP  
<https://www.minyu-net.com/serial/machi-story/FM20171008-210454.php>
- 3) 川内役場 HP  
<http://www.kawauchimura.jp/page/page000062.html>
- 4) 川内村資料
- 5) デロイトトーマツグループ HP  
<https://www2.deloitte.com/jp/ja/pages/public-sector/solutions/lg/science-and-technology.html>